時化に船出し「敗北の逃避行」

増山雄三

慶応三年（一八六八年）十二月九日に幕府を廃する王政復古の宣言を受け、徳川慶喜は京都の二条城から、会津藩や桑名藩の兵を連れて大坂城へ移るが、それは、新政府に圧力をかけ、経済と軍事拠点を押さえる意図があったからで、その時、英仏米蘭伊の外交官を呼び、今後とも権力者である意思を示した。

一方、新政府軍の薩摩藩士や浪士隊が、江戸で略奪などを行ない混乱させていた事に対抗するため、慶喜は武力で対抗する事を決意し、旧幕府軍を京都に向かわせ、慶応四年一月二日の鳥羽伏見の戦いに臨んだが、「錦の御旗」を掲げる新政府の戦略で「賊軍」とされ敗走してしまい、慶喜は拠点の大坂城を脱し、江戸へ逃げ帰ったのである

慶喜が大坂を脱する時、「中之島の八軒屋

に船を待たせておけ」と命じ、一月六日午後十時頃、大坂城の京橋口から数人の家臣らとともに、川沿いの天保山へと向かったが、多くの艦船がいたにも拘らず、闇に紛れて乗艦する筈の「開陽丸」が見つからない。

それで、慶喜一行は米国艦で一夜を過ごした後、やっと開陽丸に乗艦できたが、艦長の榎本武揚が上陸中で不在だったので、慶喜は副艦長の澤太郎左衛門に江戸行きを命じたものの、澤は海上を単に周回させただけだったのを、慶喜は見破り艦を東進させたが。七日は終日の時化で翌日も悪天候という、無理やりな航行を続ける羽目になってしまった。

紀淡海峡を過ぎようとしていた時、慶喜は負けを認めて、新政府に下る意向を示したため、江戸で態勢を立て直すつもりだった、会津藩主の松平容保や桑名藩主の松平定敬は、この話を聞いて絶句してしまった。

双方の思惑がすれ違ったまま、七日、朝廷から慶喜、容保、定敬の追討令がでたため、

彼らはさらに窮地に立たされ、おまけに、急な出航だったので、食料も物資も十分に積んでいなかったので、伊豆の下田へ寄港してその調達を図ろうとしたが、時化に阻まれそれもならず、踏んだり蹴ったりの惨めな「**敗北の逃避行**」になってしまった。

それでも、艦は出港して五日のちの十一日夜、ほうほうの態で品川沖に到着し、難局を乗り切るため、それまで余り関係が良好でなかった、幕臣の「**勝海舟**」を頼った判断が正しかったようで、翌朝はやばやと駆け付けた海舟は、その時の慶喜の様子を「**かくまで弱っているかと、己は涙のこぼれるほど嘆息した**」と周囲に語ったという。

かたや上方では、「**慶喜東帰**」の報せが瞬く間に広がり、フランス贔屓の慶喜を皮肉り「蒸気船に身を隠し、江戸に行こうか、異国にいこうか」と瓦版が洒落る一方、慶喜は気が変りやすいという性格と、元号「慶応」の中に「心」の字が二つある事にかけ、「**二心**

あり」と皮肉られたという。

いずれにせよ、こうして江戸へ帰った慶喜は、天皇の妹で先代家茂の妻だった和宮や天璋院篤子に会って、死を免れるため寛大な処分を頼み、さらに、上野寛永寺に退いたあと江戸城を「無血開城」し、水戸などで謹慎生活を送る事になるのである。

ところで、無血開城については、当初、旧幕府内では徹底抗戦を求める勢力が多数派だったが、慶喜は新政府に恭順の意を示し、徳川家の菩提寺だった寛永寺で、謹慎生活に入ったが、有栖川宮熾仁親王を大総督に就けた新政府の東征軍は、江戸へ向かって着々と進軍し、その最高司令官が、慶喜の切腹を主張する強硬派の「西郷隆盛」だった。

そこで、旧幕府側は交渉に望みをかけ、まず幕臣の山岡鉄舟が、下交渉のため駿府にいた西郷のもとを訪れた時、西郷から、「慶喜の身柄を備前藩に預け、江戸城を明け渡す」など、七か条の降伏条件が示された。

続いて交渉責任を務める勝海舟が、半月後に江戸の薩摩藩高輪屋敷で西郷に会い、降伏条件について本格的に話し合い、海舟は出身母体の水戸藩であれば慶喜の命を守れるという判断で、「慶喜の預け先は備前ではなく水戸藩に」などとする嘆願書を提出した。

そして、全ての兵器や軍艦の即時引き渡しには、旧幕府が応じないなど不十分な条件だったが、慶喜の切腹を求める強硬派だったはずの西郷は、冷静に落しどころを考えていた事もあって、「戦争は好んでするべきではない」といい、江戸城の総攻撃中止を決めた。

このように交渉が順調に進んだ背景には、実は、西郷の書状に「海舟にひどく惚れ申し候」との記述が残っている一方、勝の回顧録である「氷川清話」に、「天下の大事を負担するものは、果して西郷ではあるまいかと、またひそかに恐れたよ」書かれている。

それで、二人の交渉はおおむね勝のペースで進み、勝は、新政府軍が江戸城総攻撃をし

た場合、江戸の街を焼き払って対抗する策を練っていたと話したというが、西郷は、旧幕府に譲歩した事が反発を招き、後に、新政府内で孤立するはめになってしまった。

西郷が亡くなってから二年後の明治十二年（一八七九年）、勝は西郷の記念碑の「留魂碑」を建立したが、碑の裏には「誰よりも自分があなたのことを知っている」という意味の漢文が刻まれ、それは今、都内にある勝の墓のすぐ近くにある。

勝海舟の玄孫にあたり、功績を広める「勝海舟の会」の名誉会長を務める、五十五才になる高山みな子さんは、無血開城の交渉が成立したのは、小説や芝居では「海舟と西郷が肝胆相照らす仲」だったというが、そんな情緒的な話ではなく、国土の荒廃は経済的にも大損失だったので、二人の間では、「江戸を焼け野原にしてはいけない」という共通の理解があったからだという。

さらに、西郷が新政府内で強硬派と見られ

ていたのは、彼のパフォーマンスで、「慶喜の首を取ってくる」といった言動には、自分の背後にいる血気盛んな人達を、納得させる狙いがあったのだろうともいう。

また海舟は交渉の中で、海外留学の経験者が数多くいる、慶喜の家臣達への寛大な措置も求めているが、それは、日本の近代化に役立つ人を殺してはだめだという思いがあったからで、彼の最大の功績は、人命第一で行動し戦争を回避した事で、怨恨の連鎖を断ち、日本を近代化させる事を目指したのだろう、と思っているとも語っている。

かくして命が助かった「慶喜」は、やがて政治の表舞台から退いて、徳川家は駿府七十万石の大名として存続を許され、後に、彼は公爵にもなり長生きしたが、もし早くに命を落としていれば、「朝敵」のままで終わってしまったと思うが、混迷の時期としては、幸せな人生を全うした男だったといえよう。

令和二年六月